時事新報は日本國中唯一の毎日刊行新聞紙なり

時事新報

第千九百五十二號
明治廿一年六月十一日 月曜日
舊戊子五月二日（癸、丑）
日出午前四時二十六分
日入午後六時五十五分
月出午前五時三十五分
月入午後八時十分
滿潮午前六時十九分 午後六時三十六分
（西暦一千八百八十八年）

時事新報ハ編輯に關する書信にして往々社員へ宛御送致れ向も有之候得共宛名の社員不在の事ありて折角の報道も其用を爲さゞることも少からざれば斯る書信ハ一切時事新報編輯局宛にて御送付被下度候

時事新報定價

時事新報ハ一年三百六十五日一日も休刊せず其代價遞送料廣告料ハ左ノ如し
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓
〇一箇年前金六圓
〇時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ遞送スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ遞送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金

五號活字ニテ一行廿四字詰	一行ニ付一日限	一行ニ付二日以上六日迄	一行ニ付七日以上十五日迄	一行ニ付十六日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘
自十一行至卅行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九厘五毛
三十一行以上	八錢	六錢五厘	五錢八厘五毛	五錢五厘

時事新報

獨立の精神

人間は孤立離生の動物にあらず互に相依り相輔くるの性あるを以て人生社會の交際なき能はず即ち世渡りの道にして之を處世の法と云ふ人間處世の法、一にして足らずと雖も能く己れの地位を保ち又人の怒りを犯さずして巧みに世を渡るを以てその法を得たるものとす此一點より見るときは人間處世の法は唯その時の社會に行はるゝ風俗氣習に雷同し苟めにも奇異の擧動をなし他の耳目を驚かさゞるを以て其極意を得るものとなすことならんなれども又一方より見るときは人間の腦髓中には自ら一個獨立の精神あり此精神は人生智德の發達と共に發達するものにて高尙なる知字解理の士人中に最もその盛なるを見るべし蓋し獨立の精神なるものは世俗流俗の弊に倣はず別に自ら一局面を開かんとするものにして其極度を云へば世情に遠かり人生に迂なるの譏なきにあらざれども若しも社會に一個獨立の精神存せずして萬事流俗の流行に任せたらば人生は全く社會の俗塵に俗了せられ世に學者學問の獨立を見る能はざるのみならず之を大にしては一國の獨立も亦覺束なきことならん何となれば學者學問の獨立と云ひ又一國の獨立と云ひ畢竟人々獨立の精神の發達したるものに外ならざればなり故に一國文明の爲め又その獨立の爲めには社會に獨立の精神を養成すること必要にして即ち今の人間社會には處世の法と獨立の精神と共に兩立して互にその短處を補ふこそ最も望ましき事なれども世事はとかく注文の如くならずして實際に於て所謂文明流の交際流行する處には社交の勢力獨立の精神を抑へて其働を逞ふせしめざるの弊は世界東西の免れざる所にして西洋諸國中にても現に佛國の如きは社交の力最も盛にして上流の交際社會に於て獨立創造など云ふことは野鄙、驕傲もしくは粗暴等と同意味のものとなして痛く之を嫌ひ只管世間普通の流行を貴ぶの風行はるゝよしにて此流行が佛國の將來に如何なる影響を及ぼす可きやとは方今同國學者中にて頗りに憂慮する所ありと云ふ扨顧みて日本社會の有樣は如何と云ふに往昔封建の時代には各藩の制度何れも均一にして加ふるに武斷の政略を以てし人々個々獨立の精神は至て微弱なるが如くなりしも實際は然らずして武斷壓制の威力は其及ぶ所唯社會の表面に止まり當時士流の間に行はれたる武士道の精神は自ら社會の間に一種高尙の氣象を養成し世外に秀でゝ自ら適するもの又は終身處士を以て王侯に驕るもの三百年間その人に乏しからず今日文明流の眼を以て之を見れば其粗野の状は笑ふべきが如くなるも其中自ら獨心の尊ぶ可きものありしを見るべし維新以來西洋文明の流行するに從ひ社會の面目を一新して只管模倣改良に鋭意なるの餘り社交の趣も亦自ら一種の風を生じ獨立の精神は却て其間に退却したるやの感なきにあらず今暫く學問社會の例に就て之を言はんに學者なるものは社會に在て最も其獨立を要するの地位にあるべき筈なるに今日の實際に於ては然らずして却て其反對の例を見ること多きが如し凡そ日本國中に名を知られたる學者にして能く自立の生計を營む者とては甚だ稀にして何々先生も何々大人も其衣食の由て來る所を尋ぬれば官途の俸給ならざるはなし啻に衣食の獨立なきのみならず其人の名も學識を以て知らるゝより寧ろ爵位官等の光明に依頼して耀くものゝ多數なる可し或は數年間海外に留學卒業せる學士輩が歸朝早々は只管日本の學問社會を懸笑し自由獨立の講釋など喋々して頗る痛快の論を發し以て人を驚かすことなきにあらざれども少しく故國の風に染むれば何時しか其說を變じて尋常一樣の俗流に混じ小官を卑しとせず薄給を少しとせず伯夷忽ち裝を改めて柳下惠と爲り自ら官府の門に屈して却て世上に向て得々たる者あり又何々社中何々協會など稱する學術上の結社にも常に貴族を戴て以て總裁若しくは社長と仰ぐも近來の流行なるが如し又世間に數限りもなき著書譯書の類を見るに何公の序文何爵の題字などを冠するもの甚だ多くして而して其何公何爵は必ずしも學問の事に縁ある人物とも思はれず本來學者を以て自ら居る著譯者は此序文題字を拜領して自身の榮とするの但しは賣書博利の手段に利用せるものか何れにしても自ら欺くに非ざれば世人を瞞着せるものにして獨立の學者には聊か不似合なるが如し其他時々社會に驅屈する流行說なども其始め一人の有力者がこれを首唱すれば萬口忽ち之に和し學者社會に反對の說あると聞かず或は之を評して日本人の性質は流行に敏にして開進に易しとて竊に誇る者なきにあらざれども鄙見を以てすれば獨立心に乏しき者なりと云はざるを得ず試に見る可し三五年前まで社會改良の論流行すれば半白の故老先生までも少年子女の仲間入りして舞蹈の稽古を奬勵し道德復古の說世に出づれば少小西洋流の主義に敎育されたる學者輩が世上の俗流に雷同して時としては儒敎古學流の事を唱ふるなど如何に日本人が流行好きとは云へ之を其本心とは見るべからず畢竟この弊は社交の風潮に漂流し世渡りの楫を操るに汲々たる者にして獨學者流の口氣を以て之を責め人間に羞恥の心なき者と云ふも過酷にはあらざる可し世間或は獨立の精神を以て今の文明社會に不要なりとするものあり其言に曰く一個獨立の人果して何事をなすか唯奇癖の名を世上に賣りて自ら快しとするに過ぎず今日獨立云々の迂說を談ずるものは古儒者流の陳套を襲ふものなりなどゝて自ら其醜跡を蔽はんとする者なきにあらず蓋し古來獨立の士人にして世俗に容られず又自ら容らるゝことを屑しとせずして塵外に峭立し社交と相疎隔する者あり俗眼より之を見るときは如何にも迂拙にして世に益なきが如くなれども世俗の流行、時に情に任せて奔放止まる所を知らず世を擧て將さに不測の淵に陷らんとする其時に傍より大聲疾呼、他の危難を止むるものは社交處世の人に在らずして常に獨立の士人に在り且つ又一世の人皆な流行に醉ふも其本心未だ全く麻痺せずして正に半醉半醒の間に當り仰て清節孤幹汚塵に汚れず流俗に流れず亭々直立する者あるを見れば心に羞て自ら其本に反るものなきにあらず即ち是れ獨立の士人が能く社會の腐敗を防ぎ又一世の氣風を維持する所以のものにして其例古今の史上に少なからず社會現在の有樣を保守して其退却を防ぐに於ても獨立の精神の必要なるを見るべし何ぞ況や更に進んで國の文明獨立を謀らんとするに於てをや益々その精神の發達を期せざるべからず斯く云へばとて我輩は今代の士人に向て孤立狷介獨り塵外に逍遙して世と相違ふることを勸告せんとにはあらず苟くも其心を以てすれば濁世の中に和して流れず以て獨立男兒の事を行ふ可し我輩は特に此一義を以て世の知字解理の士人に望む者なり

雜報

○山口技師　文部三等技師山口半六氏は第二高等中學校に出張を命ぜられたるよし

○墺露の關係　墺露の兩國は各精銳なる軍馬を兩國の境界に屯せしめ一發の砲聲を合圖として兩軍互に入亂れんとする有樣なれば其關係恰も累卵の危きに異ならず從つて兩國の諸新聞は互に敵國の擧動を非難する事甚しく露新聞に墺兵露境に近きたりとて之を咎むれば獨墺諸新聞は却て露の擧動の怪むべきを論難せり現に露のモスコーガゼツト新聞の維也納通信員は墺政府が曩きにボスニアよりガリシア(露墺の境)に送りたる二大隊の兵を除き今回新に同地に向け五大隊以上の兵士を繰り出したりと報じ墺國新聞は露國が出兵するは昨秋自から高言したる如く獨墺の境に接して永久三十萬の兵士を屯せしむとの精神より出でしに相違なしと雖も我墺國も亦非常の場合に備へんため活潑なる處置をなさゞる可らずと主張し墺太利匈牙利の國會にても軍費支出案を議するに當り大藏大臣は政府のために辨護して今日我國は露に對し敵意を挾むにあらねども國威を失墜せざる樣の覺悟をなすべきなりと演べたるよし云々と近着の外國新聞に見えたり

○土耳古婦人の要求　近頃土京コンスタンチノープルに於て起りたる騷動ありと云ふを聞くに同國の大藏大臣は久しく退職士官の養老金を給與せざりしかば右の士官に關係ある婦人數百名は大藏大臣の居宅の周圍に集會して異口同音に養老金を直ちに拂ひ渡されん事を請求し恰も狂するが如く大臣を捕へ之に不禮を加へんとする有樣となりければ老年の婦人は見兼ねて一先づ
解散せるの得策
て同婦人を引例
を極めたりと近
○黃河の堤防
大河の一なる黃
は非常の損害な
て其後同國政府
る由去月十四日
は先頃該堤防工
て三箇條の困難
澤の類にあらず
を遠隔の地より
急がんとするに
からず然るに透
第三堤防破壞
る能はざる事
に依つて土石
け及び小汽船の
り就ては李鴻章
ありし末終に政
品を買入るゝ事
(支那里)の間
求め現場に移
易く大八車にて
晝夜兼業して
れり唯ゞ小汽船
び上海に送り
の小舟を用ひ
○窈窕たる女
此程まで女敎
嬢は未ゞ裏若
も恥づべき氣
多ければ縁談
も如何なる故
も甚だしき暴
と共に學校に
離き最も恐ろ
此時居合せた
自分と共に此
先に吹き飛べ
天色慘憺とし
に屋根を破り
にぞフリーマ
出で辛ふじて
同讓に保護な
は吹き飛ばさ
其近邊に五十
に幸にして恙
ればなりとて
せさるなく生
を贈りて聊か
見ゆ
○多妻多兒
三十六年間一
は亞細亞諸國
ぬ事なれども
ふべく與むべ